

そうべえ

宗兵衛が残した鬼の面

越畑の民家に、不思議な面が伝わっています。縦三三cm、横最大径二四cmの一木を削りぬいて彫られ、口には別造りの牙がはめ込まれています。頭部は八ヶ所小さな穴があけられ、そこに植物の繊維を埋め込み、髪の毛を表現しており、一見、東南アジアの民芸品にあるような容貌をしたこの面は、地元では「宗兵衛面」と呼ばれています。

この面を作ったといわれる宗兵衛という人物については、次のような言い伝えがあります。

宗兵衛は、明治一〇年（一八七七）頃、どこからともなく夫婦でやって来て越畑に住み始めたそうです。当時、岩屋と越畑の境である権現峠は、人馬がやっと通れるくらいの細く険しい道だったそうですが、宗兵衛は



宗兵衛面

誰の援助を得ることもなく、独力でこの道を開削して道を広くゆるやかにして、荷車でも通れるように改修したといわれています。

また、坊ヶ市の水路も宗兵衛が造ったとも言われ、夜にろうそくをともして地形の高低差を測量していたという言い伝えもあります。

そして明治の終わり頃、宗兵衛はお世話になった人にこの面を贈り、「私たちはこれから天国へ行く」と言い残して、越畑で生まれた女の子を連れてこの地を去り、その後宗兵衛一家の消息は誰も知らない



権現峠付近

ということですが。

宗兵衛については、面以外の資料は残っておらず、その素性等も一切明らかではありません。地域の言い伝えでは、彼は日本六十六ヶ国の寺院に法華経を奉納する目的で全国各地を巡る「六部」という巡礼者ではなかったかとも言われていますが、それも定かではありません。

越畑公会堂の横にある石碑は、宗兵衛が建てた廻国碑だという説もあります。廻国碑というのは、廻国供養塔ともいい、回国巡礼者が日本廻国を達成した時に記念して建てられるものです。越畑公会堂横の石碑は、残念ながら石の表面が摩滅し、「日本回：」の文字が読み取られるため、廻国碑であることは間違いありませんが、その他の判読が不可能であるため、宗兵衛との関わりは不明です。宗兵衛の名前が刻まれている



越畑公会堂横の廻国碑

かどうかも確認できれば、越畑での宗兵衛の立場がわかるヒントにもなるのですが、ここでも彼の謎を深めています。

さて、宗兵衛が越畑に唯一残した宗兵衛面は、現在保管されている箱書に、

「日露戦争当時 宗兵衛作 朱天童子面 此の面を以て露助征伐の具とするものなり」と書かれています。このことから、

この面が日露戦争（明治三七—三八年（一九〇四—一九〇五）頃）に、昔話に出てくる大江山の「酒呑童子」という鬼の面として制作され、日露戦争の際にロシア軍を退治する時に使われたと言われられていることがわかります。宗兵衛はこの面を三面残したと言われますが、現在は一面しかありません。

わずかに百年余り前のことですが、越畑に三〇年も滞在し、道路や水路の改修等、地域に大きく貢献しながらも、写真や文書などの足跡は一切残さず、多くの謎と面だけを残して去っていった宗兵衛は、一体どのような人物だったのでしょうか。

参考資料：『鏡野町史』民俗編、
『香北ふるさとの伝承』
協力：山田 昇

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733